

令和元年度滋賀短期大学卒業式式辞

卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。

本日は皆さんの晴れの場面を、保護者、ご家族の皆さまにも見ていただき、大勢の来賓の方々から祝福のお言葉をいただければよかったのですが、コロナウィルス症感染予防のために、このようにいつもとは違う形で式を行わざるを得ないのは、まことに残念です。皆さんもこんな時に卒業式を迎えるのは不幸不運だと思っているかもしれません。しかしこのような形で卒業式が行われても、皆さんの卒業の価値は少しも減じるものではありません。この2年間、よく勉強し、充実した学園生活をおくって、いまここに短期大学士という学位をとることができたこと、心からおめでとうと言わせていただきます。

お出でいただいた保護者やご家族の皆さまもさぞお喜びのことと存じます。式典での姿を直接お見せできなくて申し訳ありませんがお許しください。

また本日、このような状況にもかかわらず、式典にご臨席いただいた純美禮学園法人の皆さま、同窓会、後援会の皆さまをはじめ、ご来賓の方々にもあつく御礼申し上げます。

さて今回のコロナウィルス感染症に関する社会の動きには、いろいろ考えさせられることがありました。学校の卒業式についていえば、実は私は昭和46年（1971）、今から50年前に大学を卒業していますが、その時、私の出た大学では卒業式はありませんでした。それはその前の昭和43年ころから、全国の大学において学園紛争と呼ばれた混乱が続いており、通常の授業や試験が行われず、卒業式も正常に行われる状況ではなかったからです。

これは当時の大学をめぐる社会情勢が原因だったものですが、不意に襲ってくる自然災害によって、通常の卒業式ができなかったこともありました。皆さんにとっては生まれる前のことかもしれませんが、25年前の平成7年（1995）1月17日に起こった阪神淡路大地震の時、神戸や大阪の多くの学校が崩壊したり避難所に使われたりして、3月になっても卒業式が満足にできなかったところもたくさんありました。

また9年前の平成23年（2011）3月11日、ちょうど一昨日ですが、東日本を襲った地震と津波は、北海道から関東まで、本当に広い範囲の学校や子供たちが被害を受けて、卒業式など行えなかったところがほとんどでした。

その中で、宮城県気仙沼市の階上中学校という中学校は、あえて10日後の3月22日に卒業式を行いました。57人の卒業するはずだった3年生のうち3人が出席できませんでした。この卒業式で梶原裕太君という3年生が、卒業生代表として読んだ答辞があります。そのあと新聞やテレビで話題になり、文部科学省の白書にも掲載されたものです。その日から10日しかたっていないのに、あるいはその直後だからこそ、こんな言葉が出てきたのかもしれない。その一部を紹介します。

「・・・自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。つらくて、悔

しくてたまりません。時計の針は2時46分を指したままです。でも時は確実に流れていきます。生かされたものとして、顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。命の重さを知るには大きすぎる代償でした。しかし、苦況にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。私たちは今、それぞれの新しい人生の一步を踏み出します。どこにいても、何をしていようとも、この地で、階上（はしかみ）中学校で、仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていきます。・・・」

この時点で、「天を恨まず、運命に耐え・・・」という文言の背後に、どれほどの思いがあったのかと考えると、私たちがことばを失います。

この梶原裕太君は、高校を卒業してから、災害を防ぐにはどうしたらいいのかについて勉強したいと、岩手県にある工業高等専門学校に入り、制御情報工学という分野の専門家として、防災のための情報システム作りに従事しているそうです。

今日、皆さんの卒業式に当って、東北地方の中学校の卒業式の話をしたのは、あのような大災害に比べたら、今回の感染症によって卒業にかかわるイベントの中止や縮小になったことなどは、はるかに程度の軽いものだ、などと言いたいわけではありません。今皆さんに自然災害のように何か不幸なことが降りかかっているわけでもありません。天を恨まない、などといっても皆さんがピンとこないのも無理ありません。

今回のコロナウィルスの問題は、確かにこれまで世界でパンデミックと呼ばれ猛威を振るった過去の感染症に比べれば、パンデミックと認定されたとしても、まだそれほど深刻ではありません。近代以前のペストやコレラは別にしても、1918年に世界中に広がったスペイン風邪と呼ばれたインフルエンザでは世界で5000万以上の死亡者を数え、日本でも39万人の人が亡くなりました。世界大戦以上に、このウィルスは人々の生命を奪い去ったのです。

細菌やウィルスによる感染症は、戦争や災害とは違い、生命に対して目に見えない脅威として不安をあおります。それに加えて、今回のコロナウィルスの広がり方を見ていると、まさに世界がグローバル化のもとで一つにつながっていることを実感させられます。ヒトやモノが瞬時に移動する今の時代では、そのこと自体が生命を危険にさらす武器になっているのです。また人間の生命への脅威だけではなく、世界の流通経済が大打撃を受けるのも、グローバル化の結果です。このように世界のありかたが大きく変化している21世紀には、21世紀型の感染症が生まれていくのかもしれない。

このような世界全体を巻き込んだ困難な事態ではなくても、これから皆さんは様々な困難に出会ったり、いろいろな問題にぶつかったりすることがあるだろうと思います。それは本当に皆さんの身近なところや皆さんの仕事の場で、さまざまな苦しいこと難しいことに出くわすことがあるだろうと思います。そんな時に、この卒業式をめぐって起こったことを思い起こして、強くたくましく対処してほしいと思うのです。

先ほど紹介した梶原裕太君の答辞に、仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていくという言葉がありました。それに続いてさらに「後輩の皆さん、階上中学校で過ごすあたりまえに思える日々や友達が、いかに貴重なものかを考え、いとおしんで過ごしてください。」という一節があります。これは在校生に贈る言葉であると同時に、自分たちの過ごした3年間を振り返る言葉でもあると思います。あたりまえに普通に過ごしてきた毎日が、突然崩されたとき、私たちは途方にくれます。しかしそれに負けないで、強くたくましく生きていく力をもたらしてくれるエネルギー源の一つが、学校で過ごしたときの仲間や先生たちとの絆ではないでしょうか。

皆さんは、十代の終わり、もっとも青春らしい時期をこの学園で過ごしました。今この学園を卒業して、新しい一步を踏み出そうとしている皆さんにとって、この学園はかけがえのない場として胸に焼き付いているのでしょうか。楽しいこともうれしいこともあったけれど、いやなこと苦しんだこともあったかもしれません。それも含めてみんな皆さんが過ごした貴重な時間なのです。これから皆さんが社会人としてしっかり生きていくときに、それを支えてくれる大事な財産になっていると思います。

皆さんは幼稚園、小学校から始まって中学校、高等学校といろいろな学校を卒業してきました。そして皆さんにとってこの滋賀短期大学が、学校としては最後の学校になるのではないのでしょうか。その意味で滋賀短からの卒業は、同時に皆さんの学校生活全部に対する卒業でもあると思います。今皆さんは長く過ごした学校という巣から巣立っていきます。私たちは卒業した学校を母校と呼びます。母校という言葉はあっても父校という言い方はないように、学校というのはお母さんのゆりかごの延長なのかもしれません。英語にも母校にあたる語として Alma Mater という言い方があって、もともとは「限りなく与える母」や「はぐくみ育てる母」という意味だそうです。

巣の中に居れば餌はお母さん鳥が持ってきてくれるし、外敵からも身が守れます。しかし巣から出て自立したら、何かが起こった時は自分で責任をもたなければなりません。ウィルスのように見えない敵も攻撃してきます。これから皆さんは、きっとそういう荒波にもまれながら、もっともっと成長していくことと思います。そして学校時代のことを懐かしく思う時があったら、母校としての滋賀短期大学、その仲間や先生たちを思い出してください。私たちも皆さんのことをずっと見守っていくつもりです。

では卒業生の皆さん、皆さんのこれからの新しい人生に心からお祝いを申し上げて式辞とします。

令和2年3月13日
滋賀短期大学長 秋山元秀